

葬した。

- 注(13) 政宗公女、慶長13年〔1608〕仙台城に生る、母は側室柴田氏。元和5年〔1619〕2月10日石川駿河宗敬に嫁す。天和3年〔1683〕2月19日歿、76歳、伊具郡角田長泉寺に葬る。
- 注(14) 政宗公子、母は夫人田村氏。慶長14年〔1609〕3月18日歿、7歳、仙台輪王寺に葬る。菩提を弔うため後に寺を北八番丁に建て江巖寺と号した。
- 注(15) 政宗公子、慶長18年〔1613〕仙台城に生れた、母は側室芝多氏。小字喝食丸、長じて治部と称した。伊達安房成実が養って嗣とした。正保3年〔1646〕2月9日、養父成実が致死し宗実が相続した。承応元年〔1652〕3月19日安房と改称。寛文5年〔1665〕6月5日歿、53歳、亶理郡小堤邑大雄寺に葬る。
- 注(16) 政宗公女、元和2年〔1616〕仙台城に生る、母は側室多田氏。寛永4年〔1627〕11月14日伊達左衛門宗実に嫁す。12年〔1635〕4月22日歿、20歳、遠田郡涌谷円同寺に葬る。
- 注(17) p.71の注(3)をも参照。元和7年〔1621〕仙台城に生れた、母は側室多田氏。小字千勝丸。寛永9年〔1632〕11月16日元服、忠宗片名を授け宗勝と名乗り兵部と称した。正保2年〔1645〕12月晦、従五位下に叙し兵部少輔に任ぜられた。3代綱宗隠居の後、万治3年〔1660〕8月25日將軍宗勝に命じ、田村右京宗良と共に幼君綱村の後見たらしめ、磐井郡一関3万石に封じた。寛文11年〔1671〕4月3日、いわゆる寛文事件の罪によって土佐国に流され、延宝6年〔1678〕12月4日配所に於て歿した、57歳、土佐国長田郡小高坂邑吸江寺に葬る。宗勝の子宗興もまた父の罪に座し、11年4月3日豊前小倉に流され、元禄15年〔1702〕同所で歿、58歳。宗興の妹某は岩出山伊達弾正宗敏に預けられた。宗興の子3人〔千之助・千勝・右近〕は伊予吉田伊達家に御預けとなった。
- 注(18) 政宗公女、寛永3年〔1626〕仙台城に生る、母は側室村上氏。12年〔1635〕4月6日侍従京極丹後守源高国に嫁した。明暦元年〔1655〕8月7日江戸で歿した、30歳、丹後国宮津に帰葬。

資料 日本国語大辞典第1巻（小学館）

36. 御上・御上様、御下・御下様とは

問 「七ヶ宿町史」資料編の196 ページに、

『一 三石二十文 御上一人様

一 二石六十五文 御下一人様』とあるのはどういうことですか。日本史用語辞典にも出ていません。

答 これは某大名参勤上府の道中、七ヶ宿街道関宿に止宿する旨の事前申入れに対し、本陣の主人が差出した請書の中の、旅籠代〔はたごだい〕⁽¹⁾の1人当りの単価を確認した部分で「石」は「百」⁽²⁾の書き誤りか、写し違いです。そこで、正しく読み取るため、全文を次に掲げます。

『指上申御請書之事

一 来ル五月二十五日 右者御大守様当被遊御参府当所御止宿被仰付難有承知奉畏候依之御請書指上候処如件

関町御本陣 渡部清右エ門

四月五日

橋本善之丞様

山本嘉平太様

覚

一 三百二十文 御上一人様

一 二百六十五文 御下一人様 』

差出人は宿駅の町人、相手方はすべて武家とその配下であります。○様と敬語をつけねばなりません。但し、武家社会には厳然たる身分階級の格差があります。それに応じて、旅籠や賄〔まかない〕、接遇にも程度の差をつけねばなりません。そのためには、士分以上とそれ以下の2大区分によって、御上様・御下様と呼称するのが、最も実際にかなったこととして、広く通用したもののようです。

この用例を拾ってみますと下記の通りになります。

p. 239 『…御旅籠代之儀ハ御上下並〔なら〕し二百四十文ツツ五才より十二才迄半旅籠被下置候段是亦奉承知候……』

p. 206 『一御郡奉行桜田権大夫様御案内ノ〔しま〕り役共御上下十八人ニ而……』

p. 207 『一御上二方様御床敷呉座〔とこしきごぎ〕備後〔びんど〕之上花呉座にかへ……』

p. 857 『一上下人数 八百十人……』

p. 904 『常盤新九郎殿⁽⁴⁾ 五月八日晚より同九日昼迄上下百三十七人此賄数四百十一賄……』

p. 905 『慶応四年四月四日伊達藤五郎様関町御泊所御人数取調左ニ申上候⁽⁵⁾

一 斎藤 斉様 御上下二十五人 宿 友右エ門

一 引地隊右エ門様 御上下三十四人 宿 同 人

〔略〕

一 加藤小左エ門様 御上下六人 宿 吉之助

一 沢田 大蔵様 御上下三十二人 宿 留吉

一 石井 常之進様 御上下四十三人 宿 清三郎

一 太細 作太夫様 御上下十一人 宿 平三郎

一 常盤 大之助様 御上下三十四人 宿 彦平

- | | | | |
|---|---------|---------|---------|
| 一 | 唯木 健治様 | 御上下四十三人 | 宿 元 吉 |
| | [略] | | |
| 一 | 松浦 織之丞様 | 御上下三十六人 | 宿 林 吉 |
| 一 | 星 次右エ門様 | 御上下四十六人 | 宿 広 吉 |
| 一 | 樋口勘右エ門様 | 御上下五十四人 | 宿 喜 蔵 |
| 一 | 佐藤 忠内様 | 御上下二十人 | 宿 勘 五 郎 |
| 一 | 南部 次三郎様 | 御上下五人 | 宿 権 之 助 |
| | [下略]』 | | |

上下とは、上〔士分以上〕と下〔以下〕とを合わせての称呼です。

御上、御下は、丁度武家側の称呼、士、凡と対比するものです。このことを明確にするため、この資料編の中から後者の用例を挙げると、次のようなものがあります。

p. 807 『一 貳百貳拾七人 侍^〇以上^〇
 一 三百拾五人 凡^〇下^〇御^〇扶^〇持^〇人^〇并^〇徒^〇卒^〇……』

p. 890 『一 御家中士^〇、凡^〇、陪臣等……』

このように、御上様、御下様は、別に特別の意味をもった文書用語でも何でもなく、ごく普通の用い方であります。特に「御上様」「上様」は、匿名で済ませる場合、職氏名等を穿鑿する必要のない場合、最も好都合な称呼として、現在でも商店や旅館等の領収書の宛名に代って慣用されています。

すべて、文書、記録等に接する時、区々たる断片として見ると正読できず、従って、正解は到底覚束〔おぼつか〕ないこととなります。単に読み方を誇るための読みを排除し、真に意味貫通する正読、歴史を読み取る態度を堅持しない限り、必らず誤解や過りを生むこととなります。

注(1) 山中街道ともいい、徳川時代には羽州街道の上山〔かみのやま〕宿から分れて金山峠〔標高 623 m〕を越え、追分〔おいわけ〕で羽州高畠宿から二井宿峠〔標高 568 m〕を越えてきた支道を合わせて後、いわゆる七ヶ宿（湯原〔ゆのはら〕・峠田〔とうげだ〕・滑津〔なめず〕・関・渡瀬〔わたらせ〕・下戸沢・上戸沢）を経て小坂峠〔標高 441 m〕を越え、磐城国桑折〔こおり〕宿で奥州道中と合する街道で、参勤交代の大名の通る重要な街道であった。またこの地方は他領に隣接する要地であるため、金山峠下の湯原と小坂峠下の上戸沢には御番所があって警備の武士や足軽も配置されていた。そして、参勤交代の他に、高畠附近の幕府直轄領の城米や、その他の物資の輸送もあり、出羽三山詣りの多数の団体客の通行もあって、交通量は相当に多かった。明治20年東北線の開通によって、七ヶ宿街道は決定的な打撃をこうむり、急速にさびれてしまった。参勤交代のルートとしては、安政5年〔1858〕8月の関本陣の記録によると、裏日本の大名は殆ど七ヶ宿街道を通っている。即ち、佐竹（秋田）・酒井（鶴岡）・津軽（弘前）・戸

沢（新庄）・岩城（亀田）・松平（上の山）・酒井（松山）・六郷（本庄）・水野（山形）・織田（天童）・津軽（黒石）・米津（長瀬）・生駒（矢島）と、日本海側の奥羽地方の15大名中、上杉（米沢）とその支藩上杉（新田）を除く13大名が、幕末まで上下していた。幕末動乱期に入ると兵馬の往来が俄然頻繁になった。

注(2) 承った旨を記してさし出す文書。承諾書。請文。うけがき。

注(3) 旅籠銭。旅籠賃。宿銭。宿屋の宿泊料と食事代。

注(4) 田村顕允〔たむらあきさね〕。巨理伊達氏の家老で、もと常盤文吉、諱は並用、号謙斎、後に通称を新九郎と改め、義堂また珠山〔有珠山からとる〕。戊辰敗戦の際伊達氏は家中を維持することができなくなったので、顕允は新政府に願って北海道開拓の計画を樹て、胆振国有珠虻田2郡支配の官許を得た。以来刻苦精励名状を絶する困難と戦い、遂に未曾有ともいうべき成功を収め、開拓の模範と讃えられるに至った。主君邦成〔くにしげ〕はその功を以て華族男爵に列せられ、顕允もまた郡長に任ぜられた正六位を賜わった。現在の伊達市の基礎を築いた功労者である。大正2年11月20日歿、82歳。

注(5) 伊達邦成〔くにしげ〕。一門巨理伊達家最後の当主。通称藤五郎また安房、岩出山伊達邦直の弟、先代義鑑の嗣となった。人となり篤実堅忍、戊辰の役では宗家に協力しよく難局に当たったが、敗戦瓦解に終わった。明治2年、北海道開拓の官許を得て、有能無比の臣田村顕允と共に、旧臣とその家族2,651人を率い、胆振国有珠郡に集団入植を断行した。以来数年、寒苦を忍び未墾の大地に挑み、遂に実り豊かな農地を開くことに成功、伊達村と称した。邦成は常に村民の指導育成に力を尽し、自らも家族と共に製麻養蚕植林等の事業に精励し、晩年までかわることがなかったという。明治25年功により男爵に列し従五位に叙せられた。同37年11月29日歿、64歳。大正4年11月従四位を贈られた。現伊達市の開祖というべき人物である。

資料 日本国語大辞典（小学館）

37. 「榴岡」を「つつじがおか」と 読ませるのは何故か

問 「榴岡」と書いて「つつじがおか」と読ませるのは、何故ですか。

答 「つつじがおか」は、「吾妻鏡」の文治5年〔1189〕8月7日の記事に、『……泰衡者陣干国分原、鞭館……』とあって、もとは鞭館と呼ばれたところ⁽¹⁾です。地学的に上町〔かみまち〕段丘⁽²⁾